

たる農協の庁舎があり、作出西側の県道交差点から小・中学校へ至る県道の両側には、郵便局・病院・マーケット・幼稚園・自動車工場・材木店・飯店の外、新宅地の造成に伴って住宅が日増しに建ち並んでいる。したがって昔は閑散でのどかな通学道路も、今日では市街化してまさに「東与賀銀座」への様相を呈しつつある現状である。

一四 新村

この村は大正五・六年の頃までは「作出新村」と称し、作出と新村の区長が毎年交替して務めていた。それだけにこの二つの集落は接近しており、歴史的にも因縁が深かった。その後二つに分村して現在の新村として独立したものである。

昔はこの村の北部に大きい堤防が東西に走り、西村落の住吉神社北側の土堤と連続していた。即ちこの堤防は住吉方面より新村全体の北側を東部に抜け、村落の東側より北方に向かい作出に達していた。しかしこの土堤も今ではすべて水田と化しているが、それに掛けられた井樋の樋管が残っていて、昔の面影を偲ぶことができる。横尾清輔の亡母の話題を総合すると、その自宅付近に倉庫があったり、免田近くに郷倉もあったらしい。この付近は一面の海岸であって、大小の船が往来していたこと、その船舶には米俵を積んで運んでいた事も確実に覚えていると言う。

現在の戸数は五三戸、その五〇％は農業を営み半農半漁の家が一五％。それらはほとんどが海苔業に励んでいる。残りは建設業・サービス業・公務員等それぞれに家業を励んでいるのである。

この新村のほぼ中央に、菅原道真公を祀る「天満宮」がある。現在も村の東端に「天神免田」が残っているが、昔はここにこの「天満宮」を祀っていたらしい。それを昭和四十年十月この位置に遷宮され、以前葺ぶきの屋根も社殿もすっかり改造され面目を一新した。鳥居は大正十年に建てられたもので、寄進者として横尾儀助外一〇名の姓名が見られ、石工は古賀形左衛門・塚原〇七と刻まれている。

天満宮の例祭は、精進まつりと東まつりの二つのグループがある。資金作りのため経費を少なくする精進組に約二〇名が加入し、東まつりは魚料理を主として約九名が参加している。このお祭りには規約があつて、年一回開催され毎年十月十五日が例祭日である。今年当番の家に番帳さんが回され、当日の賄いについても詳しい規約が決められている。

お宮の境内には地藏さんはじめ塔や石像等が合祀されているが、文化・文政時代（約一七〇年前）のものが多い。古いので安永七年（一七七八年）約二〇〇年前の三界万霊塔がある。文政元年（一八一八）の石像には、施主山崎安兵衛外三名の氏名が刻まれてあり、その外に文政二年と三年と三年続けて二体が合祀されている。更に境内の一隅には八大龍王も祀られて、この新興村に安住する人々の信仰信心の深さ



三界万霊塔

を知ることができる。

この村落の年中行事を紹介したい。

大般若会

毎年正月十一日に定期的に開催する。般若経は下飯盛の開田庵より借用し僧侶三人で施行する。各家々から戸主が出席し会場は各家を巡番に回すことにしている。その目的は年頭に処して今年一カ年の家内繁昌とこの村の安全祈禱である。最近では大般若会の済んだ後で、村の会計決算の報告会も開催している。

二八月祭

この二八月祭は毎年二月と八月の農閑期に行うもので、村中の戸主が任意加入で加盟する。その目的は家庭安康と水田豊作を祈願するものである。昔は英彦山や太宰府天満宮に参詣したが最近では余りお詣りをしない。しかし太宰府天満宮の神盃を保存しており、講の希望者は必ず参詣している。八月祭は昔の権現講で、中年の男子が主催してやっている。

祇園祭

毎年八月下旬に天満宮で祇園祭を挙げる。この日神酒は村で準備するが、賄いの御馳走は各家から手製で持ち寄ることになっている。この祇園も戦前までは大変賑やかに楽しく、青年の宮角力を中心に遠近より売店も並ん

で参拜者も随分多かった。しかし近頃は時代と共に衰退して往時の面影はほとんど見られない。僅かに青年団員等のソフトボールの試合だけが残されているに過ぎない。

女性の行事

○豆観音講：女子ばかりで夏期八月十八日に行う。空豆を煮て皮をはいで天満宮に献上するもの。

○太師講：これも女性行事で一〇〇年前より継続している。毎月家回りで開催する。

○初午：毎年三月に挙げる。女子の黒髪がぐんぐん伸びるように祈願する。

この村には祇園や慶事の際に盛大に打ちまくった「浮立」や、子供行事の「もぐら打ち」「ほんげんぎょう」「七夕」等の生々しい諸行事があった。これ等はすべて民俗編に記述しており参照してほしい。

一五中村

中村の「字名」は、貞享年間の郷村一覧表にはなく、明治以前に住吉から分離独立したとの証言がある。それは住吉との境界に「鶴の内」と呼ばれる約三反歩余りの免田があったが、協議の結果その中から約七畝歩を中村が譲り受けて、現在も耕作しているという。この「中村」という地名は、全国的に見ても一番多く、「村の中央に当たる」とか、「中心部の役割」―等と解釈される。実際に東与賀の現地図を広げて見ても、この中村は東西南